

学位論文審査報告

全 映美

「いじめ現象のコミュニケーション論的考察」

[論文の要旨]

本論文は、いじめ現象に対し、コミュニケーション的観点からの考察を目指している。この問題設定、すなわちいじめ問題の具体的なありようとコミュニケーションとの関係性への注目の中で、以下のように大きく三つの方向を提示する。

第一にあげられるのは、特にいじめの問題をコミュニケーションと結び付けようとする理由である。例えば、アメリカのコミュニケーション研究者であるシュラム (Schramm, W.) やクーリー (Cooley, C.H.) は、コミュニケーションという言葉は人間と人間との間に共通性をうちたてる行為を意味するもの、すなわち「人間関係」を成立させるものとしてとらえている。この文脈から考えれば、人間関係の成立あるいはコミュニケーション行動というのは、人間の間で互いに交信したい、相手との関係を築いていきたいという希望から成り立つのであろう。その関係の上で、人は自分が本当に価値のある存在だと感じたり、自尊心を保つことができ、積極的に自己を高めるために努力することもできる。これは、コミュニケーションのポジティブな側面であるが、その逆に、コミュニケーションによって人間関係に問題が生じる場合もある。そこでは両面性を持っているコミュニケーションの在りようが浮かび上がってくる。

本論は第二の方向性として、その「コミュニケーションのネガティブな機能」という概念をいじめ現象において観察されるコミュニケーションの態様に適用、分析を試みる。

いじめにおいて重大な問題として考えられるのは、一度いじめられる側に回されると、そこから抜け出すのは容易ではないということである。例えば、「あいつはよくサボる」ということでいじめられ、そのいじめから抜け出ようと頑張っても熱心にやってみても、またいじめられる。何をやっても救われにく

いものがそこに潜んでいる。

更に問題なのは、しばしばいじめられる本人にその問題性が帰結されることである。一部の現場教師は、いじめられっ子にはいじめられる理由があるとすら考えている。教師からみても、「あの子はおかしい子」ということになってしまうのである。確かに何も無いのにいじめが起こることはなく、いじめられる子が何か原因を持っていることもあるかも知れない。それと同時に、単にいじめる側が悪く、いじめられる側は悪くないという判断が出てくることも多く、そのような判断自体にも問題があると思われる。

集団のなかで子どもたちがいじめに加わることには、子どもとしての幼弱性とコミュニケーション問題、攻撃性などなどの原因がある。子どもの起こす問題には身近な大人や学校の教師、社会的影響などの要因も多数存在する。本論ではその要因を子ども同士、大人と子ども、教師と子ども、社会とのコミュニケーション問題であるということに焦点を当てる。

いじめの原因として様々な事柄が挙げられてはいるものの、いじめにおける原因と結果が必ずしも結びついているとは言い切れない。また、人間は多かれ少なかれそれぞれの差異を抱え生きているが、それらの差異にマイナスのレッテルがはられて、「何々だから…」ある集団から排除されたり、いじめられたりする問題がある。ここではコミュニケーションが行われてはいても、コミュニケーション本来の意味である人間関係の構築には結びついていない。いじめというのはこのようなコミュニケーションのネガティブな機能から働くのである。言葉によるいじめから身体的暴力までエスカレートしていく状況の分析は、この関係から可能になる。

第三に、教師の証言にも見られたように、いじめられっ子にも問題の所在があるとする話を検証しつつ、いじめを生起させる背後に一体何があるのかにも注目する。例えば、英語の授業で外国生活の経験がありネイティブらしい発音ができる子が、それがいじめの理由になることを恐れ、無理にジャパニーズ・イングリッシュにしたという事例報告があった。しかし、そのような対応で実は問題は解決していない。あるいは、その子はいじめられなくなったとしても、いじめっ子は誰かほかのいじめられっ子を探し出す。子どもたちの間に、どこかにいじめる対象をみつけないという力学が働いているのである。

いじめの数が増えたということ、残酷さが増したということから、社会は

その問題を看過できなくなっている。その一方で、いじめ自体の構造が大きく変化してきており、その在りように重層性がみられる所にポイントをおいて考察する必要も出てきている。サルミヴァーリ（1996）によれば現在のいじめは見えにくく、教師も親も即座に適切に対応することが難しい。現在のいじめは、いじめっ子、いじめられっ子以外の者、いわば直接の当事者でない子どもも少なからずいじめに関与し、彼らのさまざまな言動が、その形成や維持に深く関与していることが明らかになりつつある。これはいじめがいじめっ子、いじめられっ子の当事者間に限定された問題ではなく、学級などの子ども集団全体と集団のなかでの個人と個人のコミュニケーション行動にかかわるものであることを示している。

集団内のさまざまな対人関係要因、とりわけ、各自が集団内で果たすさまざまな役割に着目して、そのメカニズムをとらえていくことがきわめて重要であるといえよう。これが本論の第三の研究方向である。

いじめについての定義として、「攻撃行動の一形態であり、故意に人を傷つける力の意図的乱用であり、反復され長期間に及ぶ。また被害者は自力では自分を守りきれない」（中野、1955）という指摘がある。

中野が定義したようにいじめは、攻撃行動の一形態である。そこで一つ焦点になるのは、攻撃行動の中身をめぐって「いじめ」と「暴力」との区別である。

いじめを攻撃形態の一つとして捉えるならば、いじめ研究のほとんどが身体的暴力・金品強奪のような犯罪行為まで、いじめの範疇に取り入れていることも理解できる。一方、いじめが暴力であることは確かであるが、いじめを身体的暴力に限定することはいじめ研究を大きく妨げる要因となり、研究の進め方にも影響を及ぼすのではないかと懸念する先行研究も見られる。松尾（2002）は、今までのいじめ研究は、蹴る・殴るなどの身体的攻撃に焦点が当てられ、無視する、悪い噂を流す、孤立させるなどといった関係性攻撃に焦点が当てられていなかったと指摘している。

「いじめ」問題のみならず「学校の暴力全般」に関する研究を続けてきたノルウェーのオルウエーズ（1991）は、いじめを暴力のうちの一つとして分類して、暴力を「間接的攻撃」と「直接的攻撃」に区別して説明する。いじめるという行動は集団の者が特定の子を排斥することであり、間接的攻撃にあたりと措定する。このオルウエーズの理論を参考にすれば、いじめと暴力

の境界線を引くのは極めて難解なことであろう。そこで筆者はこれを総合的に解釈し、このような行動の現れを、「関係性攻撃」と名づけることにする。この関係性攻撃というのは、コミュニケーション行動によって生じる攻撃である。コミュニケーションというのは、個人と個人の間で意思や意味を伝える過程であり、人と人との意思疎通を成し遂げる行為でもある。コミュニケーションなしに社会は成立できず、人間は社会なしに一人で生きることは不可能である。

コミュニケーションについて武市英雄・川中康弘（1987）は、さらに重要なこととして、人間の基本的な「社会過程」として受け止めている。筆者は、いじめ現象を理解するための一つのポイントがコミュニケーションだと考える。本論ではこのような視点を取り入れることで、関係性攻撃に関するより具体的な中身を可視化することを目指す。それは、いじめに関する先行研究の既存概念であった、身体的暴力のカテゴリーを、「無視する、からかう」などのコミュニケーションによる関係性攻撃まで拡大して取り扱うことである。

本論文はいじめを「集団の中で、仲間同士とのコミュニケーションのギャップにより、仲間関係を上手につくれない立場の子が二人以上の相手に、長い間、つづけて無視されたり、仲間はずれにされるなどで、プレッシャーと苦痛を感じ、その集団での生活を困難に感じ、自らその状況を克服できない状況である」と定義した。いじめは相手を故意に痛めつけようとする攻撃行動で、しばしば執拗に何週も何か月も何年にもわたる。そしていじめられている方は自己防御ができない。いじめの底に流れているのは勢力の濫用と、脅かしと優位に立ちたい心の表れである。関係性攻撃を用いるには、仲間を巧みに操作し、集団を意図的に動かし、特定の子どもを傷つけなければならない。しかもいじめの場合は、継続して攻撃を行う。関係性攻撃によるいじめを行うためには長期にわたり、巧みに仲間を操作し、標的となる子どもに心理的に苦痛を感じさせ、しかも自分が拒絶されないような方法を探らなければならない。これを可能にするためには仲間関係を形成・維持するコミュニケーション力が必要であり、むしろ優れた社会的認知能力を持っているとも考えられる。人は自分が本当に価値ある存在だと実感できるときのみ確固たる自尊心をもつことができ、積極的に自己を高める努力ができるが、現実的基盤に基づかない自尊心は傷つきやすく、不安定である。

現在のいじめは、いじめっ子の消滅、すなわちいじめっ子・いじめられっ子の境界の曖昧さと「いじめ」の多発・深刻化という一見逆説的な現象のうちに大きな特徴をみてとるべきであろう。かつてのいじめっ子のような明確な主体が拡散し、クラス集団や子どもグループ全体の主体が明確でない不定形な共同性および子ども集団が醸し出す集団心理の一人歩きが、いじめを発生させるようになっている。

子どもたちの共同性は、いじめるという行動に対する罪悪感を集団に転化させる。いじめに加わっている現代の子どもたちにおいて、集団コミュニケーションは、本来の機能を果たす一方、攻撃の通路、あるいは悪の通路としても用いられているとも考えられる。

子どもの成長段階上、仲間同士のコミュニケーション以上重要なものはないのであろう。そのため、いじめ現象に対するコミュニケーション論に焦点を当てたのである。

本論は、いじめにおけるコミュニケーションの構造に焦点をあてて考察した。特に1980年代の日本のいじめ現象と1990年代の韓国はいじめ現象の共通点を取り上げた。その理由は、日本で第1次いじめの流行期といわれている1980年代前半のいじめと、韓国の1990年代のいじめ現象は、行為の陰湿さ、残酷さとともに、いじめられっ子・いじめっ子の人間関係が人々の関心を集めていたからである。韓国と日本におけるこの時期のいじめは、「デブ」「ブス」「死ね」「バイキン」などの言葉によるいやがらせや相手を無視するなどの行動が目立った。続いていじめの名を借りた暴行・障害・恐喝が現れている。言葉によるいじめから身体的いじめのほうにエスカレートしていく前の段階として「関係性攻撃」への関心と討論は重要である。

とりわけ、これらのいじめは橋本撰子（1999）が指摘するように、子どもたちの集団内の相互作用によって深刻化していく現象である。ベルゲンの研究によれば、「一人の子どもが二人または三人のグループによって嫌がらせを受けるのが大多数のケースであった」と述べている。また、行政機関である文部省が実施した子どものいじめなどに関するアンケート調査（文部省いじめ問題研究会、1997）によると、学校におけるいじめでは、標的は一人の子どもになるのが普通であると言っている。

最近の韓国の例からもそのようなことはうかがい知ることができる。韓国では、少・中学校の全校生が1人の子どもをいじめるということが頻繁にお

きている。特にインターネットの匿名性を利用して全国的にまでも広がることも社会問題になっている。韓国において、全校生にいじめられる子どものことを「チョンタ」と呼んでいる。国は異なっても最近のいじめの特徴が、一人や二人の問題ではなく、より多い人間が加わっていることが注目されている。このことから、いじめ行動に対する分析を「固定された集団のなか」の子どもたちのコミュニケーションの問題として焦点を当て、分析する必要が生じる。そこで、この集団と個人のメカニズムを明らかに検討することから順次論点を展開していきたい。それを踏まえ、先行研究のいじめ分析の結果を参照しつつ、本稿で行ったインタビューの結果と比較検討を試みた。

本論文は、いじめという現象を検討し、既存のカテゴリーを更に発展的に進め、現代的な変容とコミュニケーションが具体的にどのように論じられなければならないのかを明らかにさせるため、7章にわたる記述に参考文献を添付している。

まず第1章では、問題提起と問題背景そして研究方法と論文の全体的構成に対して言及した。そして「いじめ問題の所在」を確認するため、「いじめの事例」を取り上げ、提示することを出発点とした。そしていじめ現象における「対人関係における力のアンバランス」に着目した。ここでいう「力のアンバランス」について「コミュニケーションのアンバランス」「コミュニケーションのギャップ」「コミュニケーションの差」というように、「コミュニケーション」と関連付けてその解釈を試みた。

第2章では、「いじめ」の先行研究の中で際立ったいくつかの論文を抽出し整理し本論においてのいじめの定義を提出した。

第3章では、現在にみられる「いじめ現象」の特徴と有様を確認するため日本と韓国のいじめの実態を分析、学校と社会・時代的变化によって生じた現在のいじめ現象を提示した。

韓国でのいじめが起きている原因項目には「家庭内のコミュニケーション問題」が働いていることを、イルチン会の調査分析から浮かび上がらせた。そのいじめの解決にむけ、韓国ではスクールポリス等の制度を取り入れたりしている。しかし、「韓国の青少年対話の広場」と日本の「総務庁青少年対策本部」の実態調査から明らかにされているように、親子（養育者と子ども）のコミュニケーションが最も重大な問題であることを述べた。日本における

いじめ現象については、戦後日本社会の特徴として競争社会の到来を考察した。その歪として学校教育の一律教育と少子化の表れを取り上げた。そこで子ども達の間で起きている「遊び感覚」が反映されていることを検証した。それらの分析を通じ、日本と韓国のいじめの特徴が似通っている点を浮かび上がらせた。その示唆を受けつつ、韓国・蔚山市の中学校実態調査から得た資料から親子のコミュニケーションが仲間同士のコミュニケーションに及ぼす影響と行動の差を明らかにし、インタビュー調査の内容と結果について解釈を行なった。

第4章では、いじめ現象におけるいじめっ子といじめられっ子の特徴を3章のインタビュー調査で得た結果と関連付けて再確認した。ここで人間の心の中に潜んでいるいじめ心理と、そのいじめられっ子といじめっ子のコミュニケーション行動と特徴を探った。

第5章では、いじめっ子といじめられっ子の両方の環境的要因を細分化して検討した。その具体的な項目として家庭・社会・メディアの影響を述べた。特に、いじめの環境的要因の重要性、そのなかでも、家庭内のコミュニケーション環境をいじめが起こるもっとも重要な背景要因として取り扱った。

第6章では、いじめの予防と対応策に対し家庭と学校側の取り組みについて探った。そして社会変化そのものの趨勢に対し、子どもの受験システムを再検討する必要があること、またそうした社会の現状に対して親と子が自らのありようを自立的に統制する努力が求められていることを指摘した。

第7章では結論として、第1章から6章まで述べてきたものを整理することによって検証される本論文の論旨を要約した。そして今後の研究課題と本論文の問題点を提示した。

[論文の評価]

今日の社会状況において深刻さを増している「いじめ」という現象に対し、コミュニケーションという視角から分析を試みた本論文の問題意識は高く評価されるものである。昔からあるいじめが今日拡散していることについて、子どもたちのコミュニケーション行為における著しい意思疎通の欠如に着目し、論を構築している。

本研究はそのテーマ性から、事例の紹介と分析が中心になる。事例分析では日本の事例、および約10年のタイムラグを経て日本と類似の状況が広がっ

た韓国を取り上げ、インタビュー手法を混じえて日韓におけるいじめ現象の共通項、普遍的な要因を見出そうと試みた。

その手法自体の妥当性は首肯できるものである。

しかしながら、本論のテーマは広範な社会現象であり、その分析・取り組みには学際的なアプローチが必要である。基盤となるマス・コミュニケーション研究、さらには教育学、心理学、社会学などの関連領域を取り込もうとした筆者の意気込みは評価されるものの、研究方法、アプローチにおいて、満足すべき水準には達し得なかった。その結果、今日までの状況の分析はなしえても、たとえば、いじめ行動の誘発要因として最近顕在化しているサイバースペースにおけるいじめのメッセージ性とその影響などについてといったような、新しく開拓されるべき分野への手がかりは得られていない。

またメディアの影響について十分な論証を行っていないままに、その深刻さを訴えるだけに終始し、結論部においても「いじめ」を克服するための有効な提言を行う根拠が曖昧になっている。

上記の観点から本論文は今後の検討課題を多く残している。しかし、今日の現象に困難を承知の上で取り組もうとしたこと、また、十分な展開には至らなかったにしても、コミュニケーションという新たな観点を問題の分析の中で位置づけたことは、今後への道筋となるものであり、評価に値する。

[結 論]

審査・試問委員会は討議の結果、申請論文を上智大学学位規程第6条により、博士（新聞学）の学位を受けるにふさわしいものと認め、合格と判定した。

上智大学学位規程第16条により、以上のとおり報告する。

2008年2月20日

学位論文審査・試問委員会

主査・委員長	石川 旺（上智大学大学院文学研究科・教授）
副査・委員	鈴木雄雅（上智大学大学院文学研究科・教授）
副査・委員	音 好宏（上智大学大学院文学研究科・教授）
副査・委員	神原直幸（順天堂大学人間科学スポーツ部・准教授）